「しかしの歌」

ハバクク書３：１７－１９

January.14.2024

ハバクク書３：１７－１９（パワポ）

Preface

ハバクク書１章の冒頭部分に表れるハバククの姿と、今読みましたハバクク書３章最後の場面で見るハバククの姿は正反対です。

神に不服申し立てをするハバククから、神に歌を歌いながら喜びに満ちた姿で祈るハバククになっています。

そして、その賛美として献げられている祈りの内容が、心の深いところで「そうだ！」と「その通りだ！」という聖霊の促しによる感動を覚えるような内容です。

「神さま、あなたの御旨が成りますように。速やかに成して下さいますように。激しい御怒りのうちにもあわれみを忘れないで下さい。私はあなたを静かに待ちます。」

これが、３章におけるハバククの祈りです。

ヨハネの手紙第一５：１４に、

ヨハネの手紙第一５：１４（パワポ）

という御言葉がありますが、以前のハバククの祈りは、そのすべてがことごとく、「私、私、私」で満ちていました。

でもしかし、今は、「何事でも神のみこころにしたがって願う」祈り、「主よ、我が救いの神よ、あなたさまのみわざを」と、祈りのそのすべてが、ことごとく神が中心となっている祈りに変わっています。

「私が正しいと信じていることを叶えて下さい」という要求から、「主の御心をなさしめ給え」という服従へと変わっております。

相手の主張に対して自己の立場を堅持して反論する抗弁から、「神の御心に従えるように」と、神をほめたたえる賛美へと変わっております。

Part One

神の言葉である新旧約聖書６６巻のど真ん中に、ドンと、１５０章（篇）という聖書の中で最も多い章を有する詩篇が鎮座しています。

私は、以前は、この詩篇を読み物として読んでいましたが、ある時をきっかけに詩篇を読み物としてではなく、私の祈り、私の賛美として読むようになりました。

今は召されたユージン・ピーターソンという牧師の牧師と言われた牧師でもあり、神学校の先生でもある方が書かれた本を通して、「詩篇を我が祈りとする」

ということを教えられました。
　それからは、詩篇を一気読みしようとか、解釈しようということよりも、一篇一篇を私自身の祈りとして読み、その内容をもって主に祈るようになりました。

　詩篇を私の祈りとして読むようになりますと、一つとても重要なことに気付かされます。
　それは、詩篇の多くの部分が、祈り手の不満や不安や訴えに満ち溢れているということです。
　「何なんですか、あの人。　あんな人、この世に必要ですか。　あんな人殺しちゃってください」とか、「何なんですか、この訳の分からない状況は！」とか、「あれもないですし、これもないですし、本当にマジ今困ってます」とか、「神さま、あなたどこにいるんですか？　何でこんなにも押し黙っておられるんですか？　目覚ましておられますか？」等々、生々しい私たちの心の内の声をストレートに記録していることに気付かされます。

　そんな詩篇を私自身の祈りとして祈るようになりますと、この赤裸々な告白が何とありがたいことかと実感するようになりました。
　「神さまの前で装うのではなく、心の内の正直な部分を、深い部分を神に訴えていいんだ」と勇気づけられるんです。
　そして、それらの詩篇の結論は、多くが最後は賛美に変えられているのですが、賛美に変わることなく、恨み節で終わっているものもあります。
　これがまた、どれだけ感謝な事か分かりません。
　恨み節で終わっている詩篇の何とありがたいことか、「これでいいんだ」と、「これでもいいんだ」と励ましを受けます。

　しかも、そんな信徒の告白や恨みつらみを、不平や不満や恐れに駆られている言葉を、神の言葉として聖書のど真ん中にドカッと鎮座させて下さっているということが、どれだけ感謝な事かと思うのです。
　神さまは、神さまがお語りになった言葉のみだけでなく、私たちが神との語らいの中で発する言葉までも含めて神の言葉として下さっているという安心感、何とも恐れ多く、ありがたく、祝福で、恵みであることかと思うのです。

　ハバククの祈りも、正にそのような祈りなんだと思います。
　私の主張から神への賛美へと変えられたその過程、またその霊的心境の変化の道程、自己中心から神中心へと変わるその生々しい言葉を神の言葉として、聖書に書き残して下さっているというのが何ともあり難く、「信仰とは、紆余曲折、アップダウン、呻きと感謝が共にあっていいんだ」ということを教えられます。

Part Two

　また、ハバクク書３章のハバククの祈りには、主なる神様が来られる、どのようなお姿で来られるのかということについても言及しているのですが、神が来

られるそのお姿は、１章や２章に描かれている天下無敵、縦横無尽に思えるほどのカルデア人・バビロンの姿と似ているところが見られます。
　どこが似ているのか？
　圧倒的だということです。
　目の前にあるものすべてを圧倒します。

　しかし、その圧倒の仕方・内容においては、至って対照的です。
　バビロンは暴虐・苦悩・暗黒としてやって来ますが、主なる神様は、光・賛美・救いとして、救いをもたらすためにやって来られます。

　ハバクク書３：３－１３（パワポ）

　主なる神様は御民を救うために、油注がれた者を救うために出て来られます。
　つまり、名ばかりのイスラエルではなく、本物のイスラエルを、名ばかりのイスラエル人ではなく本物のイスラエル人を救うために来られます。
　まことの神をまことの神とし、まことの神をまことに信じ、まことの神をまことに礼拝し、まことの神とともに歩み、まことの神に身を献げ、唯一まことの神が自らの存在理由であり、アイデンティティーであり、歌であり、賛美であり、喜びであり、まことの神が全てである者たちをお救いに来られると言います。

　ハバククは、「イスラエルにある悪を、悪しき者たちを取り除いて下さい」と祈りましたが、神さまは、イスラエルのみならず、バビロンに象徴される世のすべての悪・悪しき者たちの頭を打ち砕いて、その中枢にある偽りを丸裸にし、そんな裁きを通して、まことの神をまことに依り頼む者たちを明らかにしお救いになると、ハバククの祈りを凌駕する応答を下さいました。

　この神の応答は、今の時代を生きる私たちにも当てはまることではないでしょうか。
　名ばかりのクリスチャンではなく、本物のクリスチャン。
　自らを誇る者ではなく自らの罪深さを日々自覚し、自らの小ささを認め、日々神の御前に出て行き、神の御言葉に依り頼み、神がご用意下さった礼拝の場へと出て行かずにはおられず、罪赦され愛されていることを実感し、罪赦され愛されていることを自分にだけ適用させるのではなく、他者にも適用させ、聖書の言葉を他者を判断するのに用いるのではなく、自らを判断するのに用い、御言葉の前に判断された結果遜らざるを得なくなることを速やかに受け入れ、人を見下し自分の正しさを主張することを時間が掛かってもやがて手放していき、神を利用するのではなく、神に用いられることに喜びと恐れ多い気持ちを抱きながら生きる者たち。

　私が言った言葉ではなく、イエス様が仰った言葉です。
　マタイの福音書７：２１－２７（パワポ）

マタイの福音書２５：３２－４６（パワポ）

今読みました言葉は、読みようによっては恐い言葉でもありますし、厳しい負担に思えてしまう言葉かもしれませんが、でもその真意は、神様からの私たちへの愛の語り掛けだと思うのです。
「わたしがあなたを愛していることが、どのようにあなたの生き様に表れていますか」というイエス様からの愛の語り掛けだと思います。

そして、期待でもあるでしょう。
神さまは、イエス様は、私たちに期待して下さっています。
その私たちへの期待は途切れることもなく、諦めることもありません。
ただし同時に、その期待には、時間的限りがあるということも教えられます。

今ハバククは、この神の主権の中にあって、すべての物事には時間的な限りがあることを知らされ、また、その時間的限りを待つ決心と、その限りに至るまでの神からの期待に応えたいという思いに至っているのが分かります。
預言者ハバククは、新しく神に出会うのです。
そして、「私には、以前として喜ぶ理由があり、以前として歌える賛美がある」声高らかに宣言し、歌います。

Part Three

だからと言って、ハバククの置かれた現実が、好転したわけではありません。
あんなにも苦悩し、苦しんでいた現実問題が解決したわけでもありません。
すべてのことが、そのままです。
バビロンを興し、イスラエルを踏みつけるという神のご計画に変わりはありません。
あの悪名高きカルデア人が攻め込んで来て、国の隅々に至るまで廃墟としてしまうその現場で、一日一日を生き延びなければならない事実に揺るぎはありません。
いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木には実りがなく、オリーブの木も実がなく、畑は食物を生み出さず、羊は囲いから絶え、牛は牛舎からいなくなるという現実を生きなければなりません。

無くて、無くて、無くて、無くて、無いところを生きなければならない現実が目の前に迫っていることを良く知っていました。
ハバククが「無い、無い、無い」と言っているものたちは、あってもなくても生きて行けるようなものではなく、それが無くては生きることが出来ない、生存することが出来ない、この肉体の命を保つことが出来ないものたちです。
しかも、それが起こるのは天変地異のためではなく、不義と不正な者たちの蛮行によって引き起こされることでした。
ちゃんと生きている人たちにしてみれば、とんだとばっちりを受けるような

ことのように思えたかもしれません。

ハバククだって生身の人間ですから、そんな現実を生きなければならないということを考えるだけでも、夜も眠れないどころか、昼間でもガタガタ震えるほどに恐怖を覚えました。

ハバクク書３：１６（パワポ）
その音を聞いたとき、私のはらわたはわななき、唇は震えました。
腐れは私の骨の内に入り、足もとはぐらつきました。

と言っている通りです。
なのに、そんな現実を前にしても、彼は歌います。
悲しみの歌ではなく喜びの歌を、表面的に取り繕った歌ではなく、魂の底から同意している喜びの賛美を歌います。
「それでも、私には歌える歌がある」と、「私には喜べる理由がある」と告白します。

第一コリントの使徒パウロの表現を借りますと、生まれながらの人、神に属することを受け入れない人、肉に属する人、肉の人、ただの人、キリストにある幼子ハバククから、御霊を受けている人、御霊に属する人、神の霊を受けた人、御霊に教えられた言葉を用いて神の恵みを知った人に変わり、変えられたとしか表現のしようがない信仰の飛躍、霊的大どんでん返しがが、ハバククの内に起こっています。

Part Four

ハバクク書３章に見られるハバククの大反転・変わり様は、彼が身を置く現実がひっくり返った大反転でもなく、外的要因が劇的に変わったという反転でもありません。
ハバクク自身の反転です。
ハバクク自身が変わったのです。
３：１６の後半部分を見ますと、

ハバクク書３：１６（パワポ）
私は静かに待ちます。

と告白しながら、大きな苦難の日、生存が危ぶまれる大騒乱が、自分が生きているその日々の暮らしに向かって近づいて来ているということがはっきりと分かっていながらも、心を落ち着かせ、信仰の襟を正し、自らの身の処し方を神の前にあってどうするのかを決断します。
ハバクク書２：３の「それを待て」という神さまの問い掛けに、「私は静かに待ちます」という応答でハバククは返すのです。

逃げるのでもなく、びっくり仰天怖気づくのでもなく、もうこれ以上「なぜ、こんなことをなさるのですか、いつまでそうされるのですか」と抗弁を垂れるわけでもなく、「そのような状況だけは避けさせてください」と願うのでもなく、「そんなことが起こったら、神さま、あなたの神としてのご栄光が地に落ちますよ」というような神へのアドバイス、または脅迫でもなく、覚悟の告白、覚悟の歌を歌います。

信仰の歌を歌います。

「私の現実的状況がそうであったとしても、私には、変わらず歌える歌があり、変わらず喜べる理由がある」と告白します。

「何とカッコいい人なんだろう」と思いませんか？

ハバククの置かれて時代に似てなくもない今という時代、今の世の中が真に手に負えない人とは、正にこのような人ではないだろうかと思うと同時に、「こんなカッコいい人になりたいなあ」とも思ってしまいます。

Part Five

では、ハバククのこのような革命的大どんでん返しは、どこから来たのでしょうか？

先ず第一に、２章の物見のやぐらに立って受けた祈りの応答を通した神との新たな出会いが、その大反転のきっかけとなりました。

つまり、「しかし、義人はその信仰によって生きる」という神からの祈りの応答です。

その神からの祈りの応答を通してハバククの中に起こった革命は、歴史は神の御旨が成る方向へと向かっており、歴史の主権者は神であられるということの認識でした。

旧約聖書の価値は、その歴史の胎動のど真ん中にいつも神がおられるということを教えてくれることでもあるでしょう。

神のご計画だったり、信徒の祈りの応答が、明日明後日直ぐになるのではなく、４００年後とか、７００年後とか、私たち人間にしてみればとんでもない年月をかけて行われる神の御業が、歴史の中に息づきながら記されているというのが旧約聖書の価値でもあると思います。

正に、ハバククは、神の御手の中にある歴史という真の歴史観と出会いました。

そしてハバククは、そこからさらにもう一歩進みます。

不穏な歴史の胎動の中でも、喜び、躍り、楽しみ、歌を歌える根拠を示します。

その根拠こそ、今年の主題聖句ハバクク３：１８，１９です。

ハバクク書３：１８－１９（パワポ）

ハバククは、この事実を信じています。

差し迫っている動乱の現実を前にして、ハバククが、重ねて確信に満ちあふれて確認している事実は、神様と自分との関係の確認です。

私と神さまの関係において、神さまはどういうお方なのか？
その神と私の関係において、神さまが私に何をなさるのかということを思い描いてみたところ、決して悪いようにはされないどころか、祝福へと導かれるという確信へと至るほどの関係にあるということに気付きます。

ハバククは２章で、歴史がどう動こうともその歴史の主導者は主なる神様であるがために、どんな状況、世がひっくり返ったとしても、「義人は信仰によって生きる、キリスト者は信仰によって生きる」ということを確認しました。
そして、ハバククはそこからもっと先に踏み出していき、その信仰の源なるお方との自分の関係についての確認へと出て行きます。

神にあっての自分という存在の確かさを確認するわけですね。
所有や経歴や特技や歩んできた道などという世がひっくり返ったら一緒にひっくり返ってしまうような不確かなものによって自らの存在を確認するのではなく、不動の神との関係がどうなのかということで、自らの存在確認をするわけです。
そして、その存在確認を根拠に、目の前に迫ってきている現実、または直面している現実にどう反応し、どういう態度・姿勢を取って行くのかということを確認するのです。

ハバククは、「神が私の主であり、神が我が救いであり、神が力であり、神が喜びであり、神が楽しみであり、神が私の受ける割り当ての地であり、神なるお方は私の足を鹿のようにし、目に見える有限な世界に縛り付けられることのない高い所を歩ませて下さる」という確信に至りました。
神が自らの存在理由であり、神が自らのアイデンティティーであるというところから、キリスト者のすべての力、勇気、度胸は始まります。

神の大きな救済史という歴史の断片を生きる今の私と神さまとの関係における確信。
これが、ハバククを歌わしめました。
これが、ハバククを喜ばせ、躍らせ、楽しませました。

Part Six

信仰者として、私たちの真の勇気と喜びと平安の根拠はどこにあるのか？
どんな状況にあっても、信仰者として揺るぐことなくその一本道を行く根拠はどこにあるのか？
その根拠はどこから来るのか？
外から来るのか？　内側から来るのか？

または、直面している現実問題と私との関係から来るのか？
私たちが生きて行く中で直面する現実問題よりも重要なことは何なのか？
私には、以前として喜ぶ理由があり、以前として歌う歌があるんだと叫ぶことの出来る力はどこから来るのか？

預言者ハバククは、神の預言者として、その答えを私たちに示して下さっております。
「主なる神が根拠だ」と、「メシア・キリストなるイエスが根拠だ」とです。

ハバククのこの告白が、私たちの心を何とも爽やかにしてくれ、また興奮させませんか？
私たちの現実がどのようにこじれねじ曲がっても、世の中がどのようにひっくり返っても、私たちには行く道があります。
イエスという道であり、その方を信じ抜く道です。
信じる者には、以前として行くべき道があります。

コツコツと一歩一歩、転んだ時にはまた起き上がり、不義な勢力に出くわしまた転んだ時には、Ｔシャツを破って痛んだ傷に巻きつけながら起き上がってでも、その道を進むのです。
生まれながらに肝っ玉が据わっているからでもなく、神経が図太いからでもなく、世情に疎く無謀な行動を取れるからでもなく、もうなるようになれと、死のう生きようがどうにでもなれという気持ちを抱いているからでもありません。
「そういう運命だから仕方がない」と運命論的な考えを持っているからでもありません。

確かに知っていることがあり、確かに信じるところがあるからです。
この歴史が、この世界がどこに向かい、誰が治めているのかをあまりにも明らかに知っているからです。
恐くてはらわたがわななき、唇は震え、足もとがぐらつくような現実にあっても、神さまが私にとってどういうお方で、神さまが遂に私に何を成して下さるのかについての疑いなき確信があるからこそ、その道を進むのです。

イエス様が、一歩一歩コツコツと向かっていた十字架の道もそのような道でした。
信仰によって義人とされた信仰者は、依然として変わらず、信仰の道を行きます。
義人は、信仰によって、一日一日死ぬまで生きて行きます。
ヘブル書１１：１３で、信仰によって生きた祖先たちを列挙しながら断言した

ヘブル人への手紙１１：１３（パワポ）
これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。

という言葉は、信仰を守るために殉教をしたという意味の言葉ではありません。
死ぬまで、自分たちの現実を信仰によって生き抜き、時が来て死んだということです。

そのように道を進みながら、進んでいた道のある町角で、主イエス様に顔と顔を合わせるかのようにお会いしたならば、それこそ私たちの喜びであり、名誉であり、光栄です。
私たちが成し遂げた物事が名誉なのでもなく、栄光なのでもなく、真の名誉、真の栄光は、その道で出会ったイエス様そのお方、お一方が私たちの名誉であり、栄光では、光栄ではないでしょうか。

Conclusion

つい最近聞きましたある牧師先生のメッセージの中で、こんなことを仰っていました。
「どんな分野においても天才と言われる人はいますが、信仰において天才はいません。」
「すごい言葉だなあ」と、「正にその通りだなあ」と思います。

信仰においては、失敗ばかりが目に付いてしまうのが私たちかもしれませんが、失敗することは、神さまもイエス様も重々承知です。
それでも、イエス様から目を離さないということが、私たちの喜びとなり、力となり、歌となり、ダンスとなるんだと思うんです。

「どんな分野においても天才と言われる人はいますが、信仰において天才はいません」という先程の牧師先生の話を聞いた私の妻が、こんなことを言っていました。
「そうだよね。イエス様を信じれば信じるほど、聖書の言葉を神の言葉だとそのまま信じれば信じるほど、馬鹿って言われちゃうよね。」
妻のこの言葉を聞いて、「こんな馬鹿でありたいなあ」と思わされました。
ハバククもそんな馬鹿だったのでしょう。

お祈りいたします。

祝祷：ハバクク３：１７－１９